

高まる医学部人気 「成績だけで進学」の課題も

2014/11/3 3:30 | 日本経済新聞 電子版

河合塾が毎年秋に東京、大阪、名古屋の主要校舎で開く「医学部入試相談会」。9月21日の麹町校（東京・千代田）での相談会では、慶応、東京慈恵会医科、日本医科の私立医学部ご三家をはじめ医学部を持つ全29私立大が個別ブースを設けたり、資料を配ったりするなどし、会場は進学希望者ら約700人の熱気に包まれた。

「かつてのように医者の子供だけでなく、サラリーマン世帯も珍しくない」と担当者。今年は中学1年から問い合わせがあったという。

文部科学省の学校基本調査によると、2010年度に約11万人だった国公私立大の医学科への志願者数は、14年度には14万人を超えた。少子化に伴う学生獲得競争が激しさを増す中、近年は多くの私立大が6年間で計数百万円の学費値下げに踏み切っている。河合塾の近藤治・教育情報部長は「リーマン・ショック後の安定志向や、少子化で子供にかけられる教育費が増えたことも要因」と分析する。



兵庫医科大学医学部の4年次の学生に薬害の講義をする勝村久司さん（9月8日、兵庫県西宮市）

削減や抑制が続いていた医学部の定員増加も人気に拍車をかける。地方での医師不足などを背景に国は08年度から定員増にかじを切り、15年度の総定員は過去最多の9134人となる見込み。16年春には1981年の琉球大以来となる医学部が東北医科薬科大に開設予定だ。

高まる医学部熱の一方で、医師になる認識があいまいなまま、テスト成績だけで進学する学生も少なくない。

「数学のできる高校生は医学部を目指す傾向にある」。数学教育に詳しい東京理科大の沢田利夫元教授は指摘する。国際数学オリンピック出場者のほぼ半数が医学部へ進学しており、数学オリンピック財団の浅井康明事務局長は「学問で身を立てる研究者は成功した姿を予想するのが難しい。分かりやすい医師を考えてしまうのではないか」とみる。

■被害者の声聞く

こうした中、「患者中心の医療」の実現のため、医・歯学部教育の現場で、患者の気持ちを理解する実践的な取り組みが広がっている。

9月上旬、兵庫医科大学の講義で教壇に立ったのは教官ではない。妻が陣痛促進剤を説明なく投与されて過剰な陣痛のために長女を失った大阪府の高校教諭、勝村久司さん（53）だ。

4年次必修の「特別講義」では自ら集計した出生数グラフを提示。曜日別では土日の出産は平日の3分の2以下に落ち込み、時間帯別では「午後1時～2時台」をピークとする富士山型になっていることが分かる。「平日午後に出産させるため陣痛促進剤を投与している表れた。効果の個人差が大きいのに危険性を説明せず使う医師もいる」。勝村さんが指摘すると、学生らはメモをした。

勝村さんは「患者に正直に情報を伝えてほしい」と思いを伝えた。



文科省の調査では、今年度は医学科のある79大学と歯学科のある29大学全てが「薬害問題を医療倫理などの観点から講義で取り上げている」と回答。被害者の声を直接聞く講義も医学科で45大学、歯学科で13大学と半数前後が実施した。京都大や金沢大、九州大は異なる薬害の被害者の声を聞く機会を設けているという。

■ 模擬患者と面接

医師と患者の関係、そして共に対峙する病への対応の"正解"は1つではない。模擬患者への診察を通じて最適解を探す対話能力を高めようとする大学もある。

「患者さんの本当の声を聞こうとしていましたか」。6月中旬、東京SP研究会（東京・豊島）のセミナーで、模擬患者（SP）への医療面接を終えた東京医科歯科大歯学部的女子学生に、日下隼人医師は質問を投げかけた。

模擬患者は歯をインプラント（人工歯根）に置き換えるかどうか悩む高齢女性の設定。女子学生はインプラントのメリットをすらすらと説明したが、患者が不安を伝える間がなかった。日下医師の質問に女子学生は「面接時間も少なく、情報を伝えるのに頭がいっぱいでした」と顔を赤らめた。

武蔵野赤十字病院（東京都武蔵野市）の元副院長で、数多くの医療面接の指導をしている日下医師は「患者にとって病名が付くことは『上がり』ではなく、人生が一瞬にして場面転換する『振り出し』。一人ひとりが違う不安に包まれることを理解してほしい」と、未来の医師に語りかける。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.